流動研究部門を去るにあたり

宮崎大学工学部教授　黒　澤　　宏
（前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門教授）

今、考えても不思議な出会いから始まった。東岡崎駅前のレストランで夕食を取っているところに、主幹の宇理須教授が突然現れた。流動部門の教授を探しているが、引き受けてくれる人がいない。「黒澤さん、どう？」と言われても、「えッー??　流動って、なに???」。それ以来、大学内での合意を取るのに、小規模な地方大学ならではの問題にぶつかりながら、伊藤前所長が学部長へ直接お話くださり、なんとか予定通りに事が運んだことは、今考えれば薄氷を踏む思いの１年間であったかもしれない。お陰で平成１１年４月には、分子研での新しい研究生活をスタートさせることができた。

分子研とのお付き合いは、機器分析センター、極端紫外光実験施設の利用を通じて歴史は古く、いろいろな方々との交友もあったので、見も知らぬ世界に飛び込む気はしなかった。また、施設の方々の暖かい励ましも有り、研究生活も順調にすべりだし、大学における各種委員会や講義の責務から逃れ、研究三昧の生活は無事にスタートを切った。当人にとっては、突然舞い込んだサバティカルである。で、何をしよう？　折角、神が与えたもうた貴重な時間であるので、無為にすごしたくはない。かといって、今までの研究を継続するのも能がない。２年後に戻る大学で、残る１０年間に花開かせられるような新しいテーマの足がかりをつかむことをもくろんだ。幸いなことに、NEDOの助成事業による資金もあり、分子研での特別研究費をあわせて、ナノサイズの光物性に焦点を当てた研究に取り組むことにした。とは言っても、すぐに測定に取りかかることは出来ず、装置の設計から製作を始めたに過ぎなかった。柳田君が、修士課程から博士課程に進学したこともあり、２年間の間に、ほぼ全容の装置が立ち上がり、当初の目標に向かってのスタートが切れたことは、幸いだった。また、この研究テーマとは別に、私が分子研に移る直前に竹添君が学位を取ったので、分子研のポスドクに採用していただき、宇理須教授との共同研究として、放射光励起の表面反応装置と観測装置の立ち上げに参加させていただいた。細かい問題が山積みされた研究であり、思うように進まなかったことは、返すがえすも残念であったが、それなりに新しい経験を積むことが出来たことは、竹添君にとっても良かったのではないだろうか。

研究とは別のところで、忘れられないくらい楽しい出来事もあった。それは放射光学会の開催である。若い人たちと、わいわい言いながらの準備作業をとおして、親しくなれたことは何事にも代え難い。加えて、放射光関係の研究者の方々ともお近づきになれたことも。講演会が無事にスタートしたことを見届けるやいなや、受付での佐々木泰三先生たちとのワインパーティーも忘れることは出来ないできごとである。遅ればせながら、所内でお手伝いいただいた方々に、この場をかりて感謝したい。

ところで、分子研に来て最高に良かったことは、今までに出会ったことのないような種類の研究者と親しくなれたことであろう。それは茅所長とUVSORの繁政助教授である。茅所長は雲の上のような方であると想像していたのだが、たまたま同じ日に赴任したことからか、当方から見れば、「何で？」と言いたくなるほど、親しくしていただいた。また、繁政助教授には、「研究は楽しまなくっちゃー！」の

言葉を身をもって教えてもらった気がする。常日頃、「研究は趣味」と思って生活してきたのであるが、その通りの人がいたっ！て、感じである。これからもこの言葉通りの生活が出来ればと思っている。最後に、研究所のみなさんの迷惑を顧みず、当方が勝手に親しくしていただいたと思っているのかもしれないが、これからもその思いこみのママに接させてください。どうかよろしくお願いします。

毎週帰ることじゃ！

福井大学遠赤外領域開発研究センター助教授　福　井　一　俊
（前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門助教授）

大学の教官室で、まだ開けていないダンボールの山に囲まれながらこの原稿を書き始めました。たかが２年分の簡単な引越しだと思っていましたが、いざ収納しようと思うと意外に量が多く、改めてこの２年の重さを感じさせてくれています。

さて、この２年間はUVSORを中心に活動させていただきました。施設ビームラインのBL7Bを担当させていただき、このビームラインの立ち上げの最終部分と整備及びユーザー対応を行いながら、他のビームラインも使わせていただくという放射光三昧の生活でした。

ところで、岡崎には単身赴任致しましたが、単身赴任歴連続２０数年という大学のツワモノ教授から、“要は毎週帰ることじゃ”と言われ、まじめにもほぼ実行しました。おかげで、高速バスの常連となり（ＪＲは高い！）他の常連を識別できるようになりました。しかし、彼らの年季を感じさせる乗りこなしは結局マスターできずじまいでしたが（ツワモノの中には、乗車中ずっと何かの資格試験の勉強をされている方がいて感心しました）、腰痛を避けたい私はひたすら寝ることにしました。乗ったらすぐ寝て、トイレ休憩もむやみに起きず、終点まで寝つづけるのが私の極意です。いかなる状況下でも（たとえシートが体に合わなくても）寝つづけることがマイスターへの道なのです。

最後にご負担を承知で流動に送り出してくださった大学関係者の方々、受け入れてくださった分子研の皆様方、そして単身赴任を可能にしてくれた愛する家族に心より感謝いたします。

感謝の２年間

愛媛大学理学部助教授　長　岡　伸　一
（前 極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門助教授）

このたび、３月３１日をもちまして大過なく流動期間を終え、４月１日付で前任地の愛媛大学理学部に帰任いたしました。昭和６０年から平成元年にかけての４年間に続き、２度目の２年間の在任中は大変お世話になり、誠に有難うございました。お蔭様にて研究においても日常においても充実した日々を送ることができました。

研究面においては、間瀬一彦さん（現在、Photon Factory）や田中慎一郎さん（現在、名古屋大学大学院理学研究科）に教えていただきながら、主としてUVSORのBL2B1ビームラインで電子－イオン同時計数装置を用いて表面上での内殻電子励起によって引き起こされるサイト選択的な解離の研究を行いました。サンプルはSi(100)表面上に吸着した$CF_3CD(OH)CH_3$で、単層吸着と多層吸着の相違、温度変化などからサイト選択性に付いて興味深い結果を得ることができました。流動期間中に行った東京大学物性研究所の吉信淳先生のグループとの共同研究であるHREELSの結果とまとめて論文にする予定です。また、気相における電子線励起による新しいタイプの電子－イオン同時計数装置を開発中でして、愛媛大学で研究を継続いたしますので、今後ともご指導くださいますよう、どうかよろしくお願いいたします。間瀬さんが栄転した後の同時計数装置担当、田中さんが栄転した後のBL2B1のビームライン担当、UVSOR安全委員、分子科学研究所研究会世話人の経験は、大変勉強になり、今後に大いに役に立つと思います。

在任中、技官や事務の皆様のしっかりした研究サポート体制には大いに助けられました。特に、UVSORの中村永研さんにはビームラインの整備や保守で大変お世話になりました。研究所でのルームメートである佐々木時代さんをはじめ秘書の方々のサポートで事務処理を円滑に進めることができました。

帰任いたしました愛媛大学は医学部、工学部などの「実学」が主体であり、理学部でさえ学生は純粋に学問的な面白さよりも「研究が何の役に立つか」を大いに気にしていますし、教員免許が取れることが入学の大きな動機の一つになっています。そこから分子科学研究所のような「高等学術研究機関」に来るとまったく異なった雰囲気（真理の探求へのひたむきさ）を感じました。今後、このような雰囲気をそのまま継続すべきなのか、それとも時代とともに変質していくべきなのかが現在問われていると思います。個人的には、年齢的なものからも、そうした研究所の雰囲気に郷愁を覚えますが、今後の皆様の判断が益々重要な意味を持ってきていると思います。

最後になりましたが、２年間大変お世話になった伊藤光男前機構長をはじめ岡崎国立共同研究機構の皆様、茅幸二所長をはじめ分子科学研究所の皆様、特に宇理須恆雄主幹をはじめ極端紫外光科学研究系の皆様と小杉信博施設長をはじめUVSORの皆様、留守中お世話になった愛媛大学理学部物質理学科化学系の皆様に心から感謝いたしますとともに、皆様のご健康と分子科学研究所の益々のご発展をお祈りいたしまして、お別れの言葉に代えさせていただきます。有難うございました。